

興福寺西室・北円堂の調査(平城第540次)

興福寺では、境内整備にともなって1998年から発掘調査を進めています。今回は、西僧房「西室」の大房とそれに並列する小子房の北端部の調査、および北円堂周囲の調査をおこないました。ここでは紙幅の都合から西室の調査について述べます。

西室は、昨年度にその南半部の発掘調査を実施しています(平城第516次調査)。それによると、現存する大房の礎石のほとんどが創建当初の位置を保っていること、建物から基壇の端までの距離は、南面で2.1m、東面で2.2mと考えられること、大房の西に掘立柱建物が並立していたことがわかっています。掘立柱建物を小子房と想定すると、大房との距離が約2.5mと近接し、並存した場合に軒がぶつかることや絵画資料と様子が異なることから、この建物を小子房とするには問題を残しています。

今回の調査では、この西室大房の基壇規模確定と、小子房の様相把握を主な目的としました。調査の結果、西室北辺の様相は、次の3時期に区分できることがわかりました。すなわち、西室創建期から掘立柱建物廃絶までの1期(奈良～平安時代)、掘立柱建物廃絶後から西室大房廃絶までの2期(鎌倉時代から江戸時代前期)、西室廃絶後の3期(江戸時代前期以降)です。

1期は、西室大房と掘立柱建物が併存していた時期です。大房では、南半部と同様に現存するほとんどの礎石が、創建時の位置を保っていることを確認しました。礎石は、後世に据えかえられた1石のみが花崗岩であるほかは、すべて安山岩の自然石です。大房の建物規模は、南半部の調査をあわせると、南北62.7m、東西約11.8m、桁行10間、梁行4間に復元できます。また、北面の基壇外装(地覆石や羽目石)を確認しました。基壇外装の石材は、すべて奈良と大阪の境にある二上山で産出する凝灰岩です。地覆石は、北端の礎石から1.8m(6尺)の位置に据えられています。基壇の南北規模は66.5m(約225尺)と確定しました。基壇西辺が数条の南北溝によって後世に改変されており、東西規模は確定できませんでした。このほか、大房の西側に並列する掘立柱建物も確認できました。調査区内では、後世の遺構により、東側の柱筋しか残っていませんでしたが、南半部の状況を加味すると、掘立柱建物の規模は、桁行10間、梁行2間と推定で

きます。続く2期には、この掘立柱建物がなくなり、その跡地に円形土坑等が掘られます。円形土坑は直径1.2m、深さは約2.5mあり井戸の可能性もありますが、現在は水が湧きません。埋め土からは多量の土器が出土しており、最終的には土器の廃棄穴として利用したのでしょう。そのほかに廃棄穴は10基以上あります。何度もこの辺りを掘って、不要な土器や瓦を捨てたと考えられます。そして、3期は大房の建物廃絶後、カマドや埋甕^{うめがめ}、方形土坑等の施設が造られる時期です。カマドは上部の形がわかりませんが、火を焼べた焚口^{たきぐち}や壁の一部が残っていました。方形土坑は4基あり、一辺1.8～2.6mのほぼ正方形で、深さは30～80cm、半地下式の施設と考えられます。このうち1基は、多量の土器を地面に敷いたのち、その上に白色粘土を貼って床としています。性格は検討中ですが、何らかの貯蔵施設の可能性があります。

西室大房の基壇規模をほぼ確定できましたが、懸案の小子房に関しては、掘立柱建物がそれにあたるかどうか、やはり断言できません。しかし、西室北辺の土地利用の変遷があきらかになりました。特に近世のカマドや方形土坑等の施設群は、近世の興福寺の様子を知る上で、重要な成果といえるでしょう。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



西室北端部全景(西から 奥に大房の礎石がみえる)